

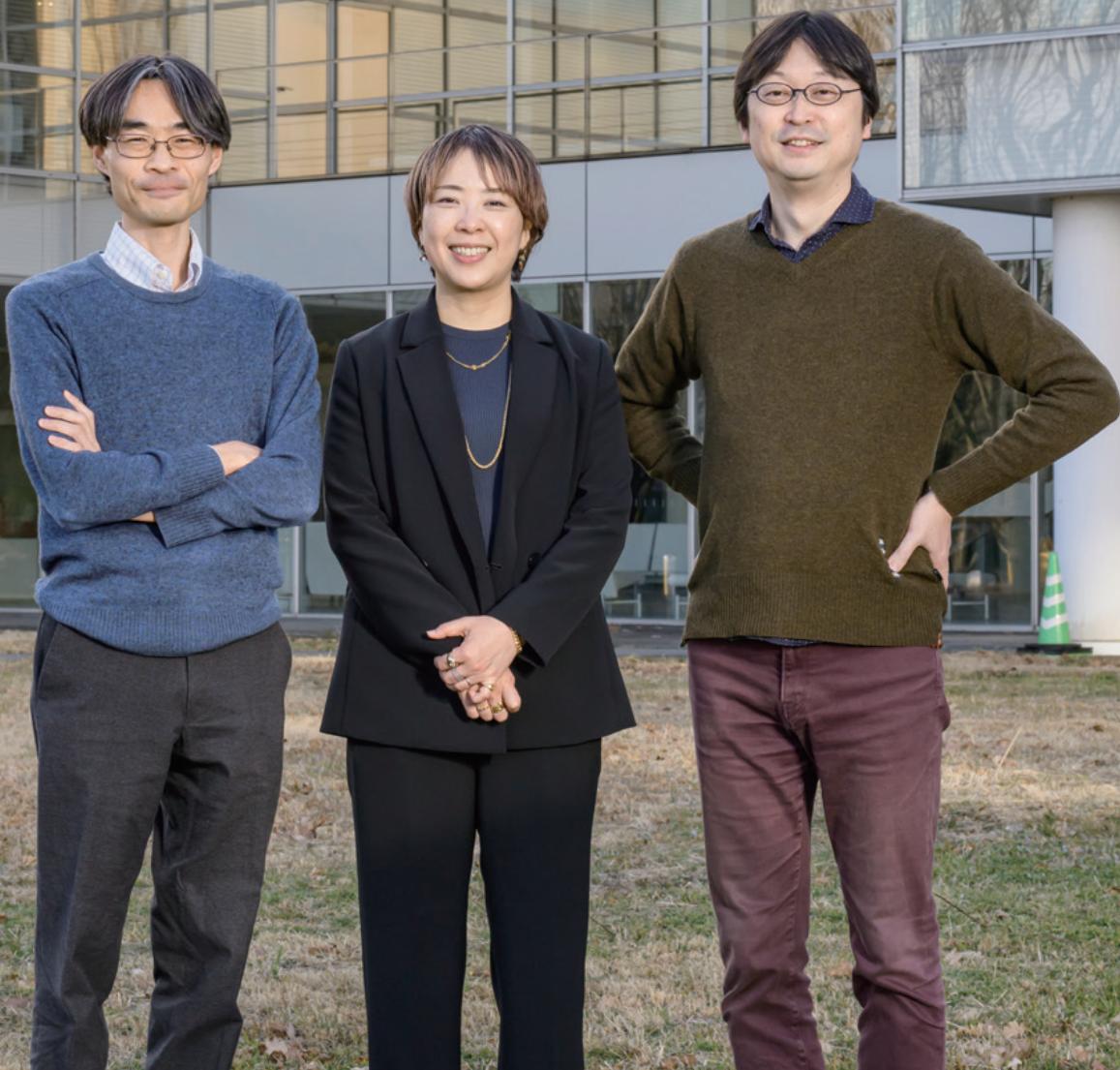
国立国語研究所学術情報リポジトリ

ことばの波止場 vol.14

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所広報室ことばの波止場編集部会 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000568

ことばの波止場

2025 vol.14



特集 ● 言葉と文化と生成AIと
● 「方言AI」を開発しています
● 日本語は多様です！
● ニホンゴ探検 2024 開催報告

インタビュー ● 知的好奇心に駆られた研究をしていきたい：井戸美里
● ことばだけでは、ことばは理解できない：持橋大地
● 外来語増加の実態は？
自作コーパスで調べてみました：金 愛蘭
● アイヌ語がゴローニン事件解決に貢献：フガエワ・アンナ
● 研究室を飛び出して：大西拓一郎
研究室訪問
書籍紹介



特集

言葉と文化と生成AIと

言語学、哲学、工学。

異なる学問分野の専門家3人が「言葉」とそれを取り巻く問題について語り合います。

窪田：古田さんのご著書^{*}には「魂ある言語」と「魂なき言語」という表現が出てきます。私は言語の形式理論、古田さんの言葉で言うところの「魂なき言語」が専門なのですが、今日はクロストーク、つまり異分野格闘技なので、お二人とあえて「魂ある言語」の方についてお話ししてみたいと思っています。

荒瀬：私の専門は、自然言語処理です。言語データを工学的に処理し、人間と遙色ないレベルで言語を理解し生成する技術の実現を目指して研究をしています。魂のない手法で「魂ある言語」を処理しようとしている、と言えるかもしれませんね。

古田：「魂」というのは、20世紀前半の

哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインが書き記した一節から取っています。彼は、「言葉というものには魂があるのであって、単に意味があるだけではない」と述べています。例えば、彼がそこで実際のところ何を言わんとしているのかを明らかにする、といったことが私の研究の幹になっています。

大規模言語モデルの光と影

窪田：膨大な言語データを学習して文章を生成する大規模言語モデル（Large Language Models : LLM）が開発され、それを活用したChatGPTのような生成AIサービスが多くの人々に使われています。コツコツと言語資源を整備してきた国語

研のわれわれとしては、そうした急激な動きを面白いと思いつつも戸惑いを感じています。荒瀬さんは「LLMの光と影」というタイトルで講演をなさっていますが、光と影とはどのようなことでしょうか？

荒瀬：これまでの自然言語処理では、流暢な文章を生成することそのものが課題でした。LLMの登場によってこの課題は解決し、ぱっと見では人間が書いたのか、言語モデルが生成したのか分からぬ状況になりました。そのおかげで、工学的努力を、意味を理解する、文章にどういった内容を持たせるかといった、より言語の本質に迫る技術に充てられるようになり、LLMを応用したさまざまな便利な技

術がどんどん登場してきました。これがLLMの光の側面です。

一方で、LLMが生成する文があまりに流暢で自然なために、人間がLLMとの会話に依存してしまう問題が指摘されています。海外では、ドラマのキャラクターを再現するLLMとの会話に入り込み、その影響で自殺するということも起きてています。依存性は、これまでの言語モデルでは考えられなかった問題であり、LLMの顕著な影の一つです。

古田：LLMは驚くべき技術であり、ある種の疑問や恐怖を感じる人も多いようです。果たして、私たち人間は言葉を理解しているが、LLMは理解していない、というふうに言えるのか。人間がやっていることとLLMがやっていることには、実際のところ違いはないのではないか、という疑問ですね。しかし実は、「流暢に言葉を使って受け答えすることができれば、言葉を理解していると本当に言えるのだろうか」というのが、ヴィトゲンシュタインの追求し続けた問いでした。彼は一般的には、「言葉の意味とは、その使われ方である」という、いわゆる〈意味の使用説〉の提唱者として知られていますが、彼の関心は、本当はその先にあります。今、LLMを多くの人が体験するようになり、彼の問いの核心をずいぶんと理解してもらいややすくなった。問いをかなり共有しやすくなった。ヴィト

ゲンシュタイン研究者としては、このことがまずありがたいし、面白いですね。

窪田：古田さんは、ヴィトゲンシュタインに影響を与えたカール・クラウスという哲学者が、20世紀初頭、紋切り型の言説への大衆の依存に警鐘を鳴らしていましたことをご著書で書かれていますよね。人間ってそもそも、そういう人工的なもの、見かけだけ自然なものに依存しやすいのではないかと思うのですが、LLMは、心を持つようになる、つまり、「魂ある言語」を話すようになるのでしょうか。

古田：依存性で思い出したのが、20年以上前に発売されたAIBOというペットロボットです。それを本物のペットのように扱い、壊れて修理ができないとなると心底悲しんで、お葬式まで行う人もいました。人間は確かに依存しやすい一面があるというか、思いのほかすんなりと信じやすい一面があるのだと思います。断片的な振る舞いとか言葉だけであっても、そこに犬らしさや人間の心といったものを感じ、すっと受け入れてしまう。ひいては、依存してしまう……。特にLLMの場合、画面に現れる文章のやりとりだけで依存する人がたくさん出てきているわけですから、これは、人間というものの特性に関して重要なことを物語っていると思います。

言語モデルは「魂ある言語」を話すか？

窪田：荒瀬さんは、「いい感じのホテル

ありませんか？」という人間のいい加減な問い合わせに、いい感じに聞き返しながらホテル選びを手伝ってくれるような言語モデルが欲しい、という話をされています。そこまでくると、もうほとんど人間と同じなのではないかとも思うのですが、LLMは、心を持つようになる、つまり、「魂ある言語」を話すようになるのでしょうか。

荒瀬：私はかなり工学的な人間で、乱暴に言うとLLMが工学的に役立つのであればそれでよいと考えている節があります。外から見て心を持っているように振る舞うのなら、それは心を持ち、「魂ある言語」を話していると思ってもよいのではないかであります。ヴィトゲンシュタインには怒られるかもしれませんのが、ある意味で人間も似たようなものではないかな、と思うことがあります。

古田：何を実現しようとしているのか、何を理解しようとしているのかで変わってくると思います。ヴィトゲンシュタインが「言葉の魂」と言うとき、主に考えていたのは詩についてです。私たちが心を打たれる、腑に落ちる、思わず噴き出して笑ってしまうような言葉を、言語モデルが生成することは当然できると思います。しかし、その言葉を生成するときに、言語モデル自身が心を打たれる、あるいは「驚く」ということはないでしょう。逆に、人間にはそのように「驚く」こと



窪田悠介 KUBOTA Yusuke

2010年、アメリカ・オハイオ州立大学言語学科でPh.D.取得。日本学術振興会特別研究員PD、同海外特別研究員、筑波大学人文社会系助教を経て、2019年より国立国語研究所研究系准教授。専門は理論言語学（統語論・意味論）。

がある。このことが、「言葉の意味」とか「意味を理解する」ということにとって極めて重要な要素だと私は思うのです。しかも、心を打たれる、腑に落ちる、思わず噴き出すといったことは、文化的背景や経験によって異なる場合がよくありますし、人間同士の場合、そうした経験の共有がしばしば必要になります。

荒瀬：個人的な背景の影響は大いにあります。言語モデルの個別化はこれらの研究開発の方向性として意識しています。と言いつつも、私が想定していたのは、その人に合ったニーズを満たす、あくまでも「ツール」であって、詩に心を打たれることや、経験の共有といったことは、想像もしていませんでした。

人間の言葉が変わっていく？

荒瀬：現在の言語モデルは、同調しやすい傾向があると言われています。学習する言語データに否定で返すものが少ないことが原因の一つのようです。確かに、

人間はあまり相手の話を聞いてくれませんが、言語モデルは話を遮ることなく最後まで聞き、同調した応答をしてくれます。

古田：言語モデルが同調しやすいというのは、救いになる面もあるとは思います。人間同士のやりとりの場合、流暢に話すことへのプレッシャーが強く、遠慮してぎこちなくなってしまうことがあります。一方、言語モデルはうまく話せなくともずっと待ってくれますし、ずっと話し相手になってくれます。途中で話を遮ったり無視したりすることもないため、話し相手として使って、話しながら考えを整理したりできます。ただし、先ほども出ていたように、私たちは簡単に依存してしまう傾向があるので、そこに対処するための仕組みも必要でしょう。

荒瀬：言語モデルと会話することに慣れることで、人間の言語が影響を受けることも考えられます。LLM以前に機械翻訳でも同様の事例がありました。機械翻

訳にそのままの日本語の文章を入れても思ったような翻訳にならない。そこで、省略を補完して翻訳させて結果を見てまた元の文を直し再翻訳、といったことを繰り返すと、満足のいく結果を得られるようになります。LLMでもプロンプトと呼ばれる指示を文章で与えますが、初めはなかなか意味疎通がうまくいきません。しかし繰り返すうちに指示の出し方がだんだんうまくなり、意図した応答が得られるようになっていきます。つまり言語モデルに忖度して、人間の言葉の方がゆがんでいく可能性もあります。そして、それを言語モデルが学習することでさらに変容が進みます。

古田：私もよく機械翻訳を使いますが、ブラッシュアップをしていく過程で、だんだんと誤解の余地が少なく、構文が明快で、多義性を持たない、つまり「やさしい」言葉に寄せていく感じになります。

窪田：そこ、個人的にはすごくもやもやします。文系の分野だと論文を書くときなどに、レトリックの切れ味で勝負するみたいな面が良くも悪くも存在します。だけど、皆がLLMを道具として使うようになると、そのうち言葉にレトリックなんて要らない、といったふうに人間の言語自体が変わっていくんじゃないかな、みたいに思ったりすることがあって。

古田：その可能性はすでに現実化している部分もあります。私自身はけっこう危機感を抱いていますね。複雑性、多義性、曖昧性をそぎ落としていった言語には、メリットとデメリットがあると思います。

荒瀬：言語から感じる情緒や味はなくなりますよね。

古田：言葉を発することは、物事のある側面、相貌を照らし出すことだと思うのです。しかも、それぞれの言語に、特有の相貌を照らし出す語彙がたくさんある。それがとても面白いし、われわれの発想の源泉にもなっているはずです。そういう豊かさや多様性が失われてしまうとすると、それは大きな損失だと思います。

話された言葉と書かれた言葉

窪田：文字というものについて、どうお考えですか？ 私は「文字は言語においては副次的なものである」といった野蛮なことを平気で言う研究伝統に属している人間なのですが。

古田：古代ギリシアまでさかのぼると、当然文字はすでに使われていて、書物として残せる環境はありました。当時の学者の中には、ソクラテスのように、絶対に書物は残さないという方針を取っている人が何人もいました。彼にとっては、広場で誰かに語りかけて問答する、その相手とのやりとりが自分の活動の全てでした。それに対して弟子のプラトンはたくさんの書物を残していますが、ただ、師匠を見ているので、文字に対する強い不信や疑問もありました。実際彼は、その場で誰か特定の人に対して熟慮をもって発せられる言葉こそが最も重要なものの、他方、文字は警戒すべきものであるということを、矛盾しているようにも思えますが、まさに文字で書き記しているわけです。

窪田：例えば、この鼎談で私がちょっと不用意な発言をしたとするじゃないですか。先ほどの「野蛮なことを平気で言う研究伝統」みたいな。そういうものが、この場から切り離され、発言だけが取り上げられてしまうと、確かに怖いですね。「窪田は、理論言語学は野蛮な学問と言った」みたいに。ですが、文字が発明されて記録できるようになって以来、私たち人間はもうそこから逃げられないの



荒瀬由紀 ARASE Yuki

2010年、大阪大学大学院情報科学研究科博士後期課程修了。博士（情報科学）。Microsoft Research（中国北京）、大阪大学大学院情報科学研究科マルチメディア工学専攻准教授を経て、2024年より東京工業大学（現 東京科学大学）情報理工学院教授。専門は自然言語処理、言い換え、言語教育支援。

かもしれません。

古田：それがまさしくプラトンが危惧していたことです。人々が文字や書物に頼って記憶をいわば外部化するようになると、本当はものを知らないのに知っているかのようにうぬぼれるようになる、とか。それから、文字はそれが書かれた文脈を離れて独り歩きしてしまうから、誤解が誤解を呼んだり思わぬ影響を与えてしまいがちだ、ということを彼は指摘しています。

荒瀬：なるほど。古代ギリシアの時代から、発言がツイートのように意図しない形で拡散されることに対する危惧が表明されていたのですね。

古田：ただ、そこには良い面、面白さもあります。言葉が独り歩きすることで意図しなかったアイデアが喚起されたり、伝言ゲームのように、いわば「不正確」に変わっていくことも、言葉の本質的な魅力だと思います。言葉は、その場で発せられてやりとりされるものと、文字など記録されるものという両面性を持つのだと思います。

言葉を巡る問題は連続している

窪田：多方面にわたる話題について刺激

的なお話を伺うことができました。最後にお二人から一言ずつお願ひします。

荒瀬：生成AIの登場によって浮かび上がってきている依存性や言葉の変容といった問題は、少しづつ形や見え方は違うけれども、ソクラテスの時代から続いている、本質的には変わらないということが、とても興味深かったです。そして当然ながら言葉は「文字列」ではなく深淵なものだということも改めて理解できました。

古田：言葉を巡る問題の本質は、ずっと変わらずに存在しています。肝心なのは、それがまさに言葉の特徴だということであって、その特徴とどう向き合うかだと思います。だから少なくとも、言葉を巡る問題が技術や規制で解決できるという幻想を抱くべきではないでしょう。そうではなく、良くも悪くも言葉というものが持つ諸特徴を、改めて丁寧に見返すことが必要なかもしれません。

窪田：私としては、今回の鼎談は、ちょっと分野的に距離がある人たちと手探りしながら話していた感覚が新鮮でした。3人で今日ここに集まつたことが、今後の異分野間の対話が活発になっていくことの一つのきっかけになるうれしいなと思っています。



古田徹也 FURUTA Tetsuya

2011年、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員PD、新潟大学人文社会・教育科学系准教授、専修大学文学部准教授を経て、2019年より東京大学大学院人文社会系研究科准教授。専門は倫理学、言語哲学、近現代の西洋哲学。

特集 「方言AI」を開発しています

生成AIを用いて方言で対話できる「方言AI」を開発する

——この画期的な取り組みを進めている鹿児島大学准教授 坂井美日さんに、方言AIの始まりから将来展望まで、お話を伺いました。

聞き手は、危機言語研究を専門とする国語研特任助教 横山晶子さんです。



坂井美日

鹿児島大学 共通教育センター 准教授

方言AIとは？

方言を話す人と標準語を話す人がスムーズに対話できることを目指した、生成AI*を用いた翻訳および対話システムです。

* 生成AI：学習データをもとにテキストや画像などのコンテンツを新たにつくり出す人工知能



横山晶子

国立国語研究所 研究系 特任助教

方言AIの開発を始めたきっかけは？

熊本地震です。

横山：坂井さんは熊本のご出身でしたね。でも、AIの専門家ではなかったと思うのですが。

坂井：2016年に熊本地震が発生したとき、県外から来た医療従事者と地元の人との意思疎通で方言が障壁になっていることが問題となりました。地震直後、方言研究者を中心に方言集をつくって意思疎通を支援しようという動きが起こり、私も当初

は、地元の役に立ちたいという思いで参加していました。しかし配布した方言集は、現場ではあまり使われなかったと聞いています。災害後の医療現場は、冊子を開いて方言の意味を一つ一つ調べができるような状況ではなかったのです。

そのとき、ハンズフリーで使って、そばに置いておくだけで方言を標準語に翻訳できるものがあればいいな、と考えました。しかし2016年当時、それを実現するのは到底無理な話でした。でも最近になって生成AIの技術が大幅に進化したので、今なら私でも実現できるのではないか？ そう考え、2023年ごろから方言AIの開発に取り組み始めました。

医療現場における方言の壁というのは、例えば？



「ビンタが痛い」と言われて頬を診てしまう、といった誤診やミスコミュニケーションです。

方言AIをどのようにつくるのですか？



方言の言語データをAIに学習させます。鹿児島方言は利用できる言語データが少ないため、工夫が必要でした。

横山：以前、消滅危機言語の継承支援に活用できないかと、生成AIに興味を持ったことがありました。しかし、生成AIの学習にはビッグデータが必要で、精度は学習データ量に依存するため、方言の生成は難しいと感じました。その状況が変わっているのでしょうか？

坂井：言語データの量が少ない低資源方言は生成AIに向かないというのは、変わりません。そこで、通常AIに学習させる①鹿

児島方言の会話と標準語の対訳テキスト、②会話に出現する方言固有語彙の標準語対訳辞書に加えて、③鹿児島方言の文法情報など言語知識の概説を学習させたところ、生成精度が上がったのです。この記述言語学の3点セットを教えてあげることが、方言の生成精度の向上に有効であることが明らかになりました。現在の鹿児島方言の生成精度は85%です。

る会話や語彙を増やすことで、さらに精度を向上させられるを見込んでいます。音声生成にも取り組んでいますが、アクセントやイントネーションの精度を十分に高めるには5,000文以上を学習させる必要があるというので、頑張っているところです。

横山：2023年に「鹿児島方言週間フェスティバル」に展示された「AIせごどん」は大きな注目を集め、マスコミでも紹介されました。これを開発したのも坂井さんの研究室ですね。

坂井：西郷隆盛さんが鹿児島方言を話し、しゃべりに合わせて顔や口も動きます。「AIせごどん」は決まった文しか話せませんでしたが、この技術と方言AIを組み合わせることで、西郷さんと鹿児島方言でおしゃべりができるようになるかもしれません。

生成精度85%というのは、とても高いですね。方言AIを使うと、どのような鹿児島方言の文がつくられるのでしょうか？

「鹿児島方言で東京スカイツリーについて200字くらいで説明して」という指示で生成された文をお見せします。

坂井：精度85%というのは、生成結果を文節ごとに鹿児島方言の話者に評価してもらったものです。なお、学習させた方言会話にスカイツリーの話題は含まれていません。今後、学習させ

生成結果

東京スカイツリーは、東京のスミダクにあるどー^c。この^bタワーは、ふととかで、世界ん中で一番高かタワーじゃった。スカイツリーんてっぺんから見つと、東京ん景色が一望できっと、よか眺めじやらいね。特に夜ん景色は、光がきらきらして、きれいかどー。スカイツリーん中には^bおみせもずんばいあつで、おきやっさーが買い物^bしたり、食事したりできっと。また、そこには^b展望台もあって^b、わっぜ高かところから^b東京を見がでくっど。天気のよか日にや、富士山も見えっど。スカイツリーへの行き方は、電車で行くのが^b便利じゃっど。東京スカイツリー駅や押上駅からちかいから^b、そっから歩いていけっど。

Bは不十分（方言文脈の中にあっても良いが、より伝統的な言い方がある）、Cは不自然（意味は分かるが、当該方言として違和感がある）と評価された文節。D評価の非文（文法的、意味的に不可）はない。



西郷でごあす。
ゆくさおさいじゃしたー！
(西郷です。
ようこそいらっしゃいました)

「AIせごどん」
YouTubeで動画をご覧いただけます。
https://www.youtube.com/watch?v=7XnWfClg_sU



AI犬『かるかん』です。
マイクボタンを押して話しかけてね♪

鹿児島方言で音声会話ができる「AI犬 かるかん」。鹿児島大学 坂井研究室と monoDuki 合同会社の共同で開発中。

トがあれば、方言でリラックスしておしゃべりできるようになるのではないかと考えています。見守りロボットからの声かけも、方言だと喜ばれると思います。

方言に触れる機会を増やしたいという思いも、方言AI開発のきっかけの一つでした。方言を学びたいけれども、母語話者との会話は気後れするという人もいると思います。何より、方言の話者は減っています。スマートフォンが相手ならば気軽にいつでも方言に触れ、学ぶことができます。学校の教室にも方言AIロボットを置きたいですね。ロボットが子供たちに方言で話しかければ、方言に興味を持つようになり、方言学習が自然と進むのではないかでしょうか。

横山：消滅危機言語の継承にも活用できそうですね。方言AIのこれからに期待しています。

方言AIについて、今後どのような展開をお考えですか？

医療や介護現場での方言の壁の解消に加え、方言学習にも役立てたいと考えています。

坂井：まずは、スマートフォンで方言AIを使えるようにする計画です。さらに、このシステムをロボットに搭載することも検討しています。高齢者は標準語で話しかけられると身構えてしまい、うまく会話できないこともあります。介護現場に方言AIロボッ



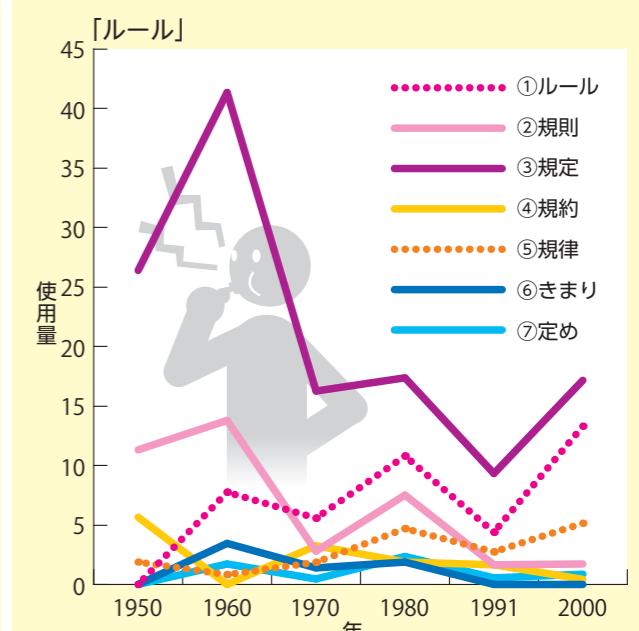
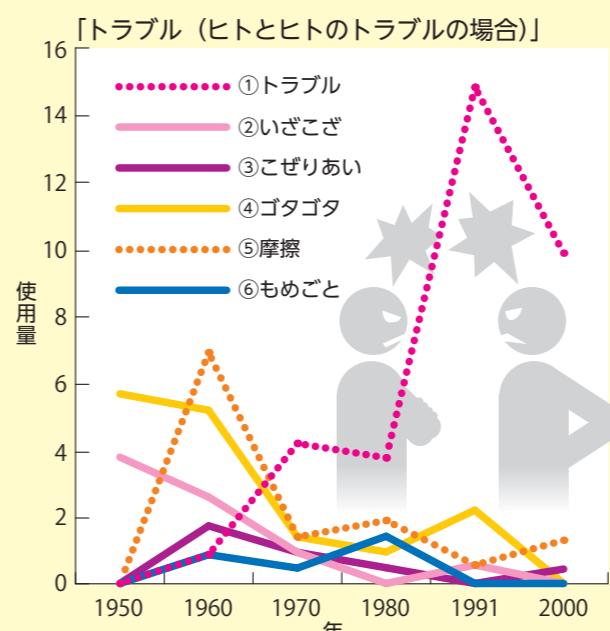
外来語増加の実態は？ 自作コーパスで調べてみました

金 愛蘭



Eran KIM。日本大学文理学部准教授。韓国生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。国立国語研究所特別奨励研究員、早稲田大学インストラクター、東京外国语大学講師、広島大学講師・准教授を経て、2019年より現職。専門は日本語学・日本語教育学。共著に『基礎日本語学』（ひつじ書房）、『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の語彙・表記』（朝倉書店）など。

外来語と類義語の使用量の変化



使用量：100万字当たりの出現度数

皆さんは、日々の暮らしの中で、ことば（日本語）の変化というものを感じことがありますか？ 音韻や文法に比べると、語彙の変化は比較的分かりやすいと言われています。新語・流行語はその代表的な例でしょうし、逆に死語・廢語と言われるものもあります。ただ、こうした個別の語の増減をきちんとした数値で確認することは簡単ではなく、まして膨大な数の語の集合である「語彙」について、その変化をデータに基づいて計量的に明らかにすることは非常に難しいものです。

1987年に発表された国立国語研究所の『雑誌用語の変遷』は、そうした計量的な語彙史研究の先駆と言えるものです（研究代表者：宮島達夫氏）。これは、雑誌『中央公論』という同一の資料を対象に、1906年から1976年まで10年おきに1万語を抽出し、調査単位を統一した語彙調査を行ったもので、この期間に増えた語・減った語をはじめとして、語種（和語・漢語・外来語・混種語）や品詞の構成比の変化、意味分野を同じくする語（似た意味や関連性をもつ語）の量的な変動などが調査されました。ただ、各年1万語と小規模な調査であったため、例えば外来語が増えているという傾向は確かめられましたが、具体的にどのような外来語がどのように増えているのか、またその要因は何か、といったことを検討するまでには至りませんでした。

この外来語の問題については、私も日本に留学

してきたころから興味があり、「外来語が増え過ぎて困るとよく言われるが、それを、単なる印象論ではなく、実際に確かめることはできないだろうか」といった問題意識をもっていました。しかし、もちろん、20世紀半ば以降の現代語に関する統一的大規模なデータ（コーパス）は存在せず、その検証は難しい状況でした。

そこで私は、今から20年近く前になりますが、上の『中央公論』の調査に倣って、自分で『毎日新聞経年コーパス』という通時コーパスを作成することにしました。このコーパスは、『毎日新聞』の1950年から2010年までの記事を10年おきに標本抽出し、その見出しと本文を入力したもので（1991年以降は『CD-毎日新聞記事データ集』を利用）、最新の第4版では全体で延べ約772万語（短単位）と、概算で『中央公論』コーパスの約60倍以上の規模をもつコーパスとなりました。

以下では、このコーパスを用いた外来語に関する調査結果をいくつか紹介します。なお、これらの結果を含む研究成果を2024年に拙著（金、2024）^{*1}にまとめましたので、詳しくはそちらをご参照ください。

（1）外来語は増え続けている

1950年から2000年までのデータ（第1版）を分析したところ、外来語は延べ語数（語の使用回数の合計）・異なり語数（語の種類の合計）とともに増え続けていることが明らかになりました。

これは周辺的な語彙（低頻度語）だけでなく、日常的に使われる基本語彙（高頻度語）でも同じ傾向が見られました。

（2）抽象的な意味を表す語が増加

個々の外来語について、どのような語が増え、どのような語が減ったかを数値とともに示しました（詳細は金（2011）^{*2}で確認できます）。使用量が増えている高頻度の外来語を分析した結果、「トラブル」「ケース」「レベル」「ルール」「イメージ」「タイプ」「ストレス」「サービス」「システム」など、抽象的な意味を表す語が多いことが分かりました。また、「チェック」「スタート」「アピール」のような動名詞（サ変動詞語幹）も増えています。これらの結果は、従来言われていた「外来語は具体的な意味分野（例：食べ物、道具など）に多い」という見方を覆すものです。

（3）外来語が増えた要因：意味が広く変化

こうした抽象的な外来語は、既存の和語や漢語が表していた意味を（代わりに）担うものが多いので、基本語化（あることばが日常的に使われるようになること）の要因を考える場合に、これら類義語との関係を考慮に入れなければなりません。例えば「トラブル」は、その意味範囲が類義の「いざこざ」や「不具合」といった和語や漢語よりも広いという特徴をもっています。この語は、基本語化の過程で「ヒトとヒトとのトラブル」「モノのトラブル」「モノゴトのトラブル」という大き

く分けて3種の意味用法を表すようになりますが、これによって、それを別個に表す数十の類義語の意味を1語で表現できるようになりました（左の図）。一方、「ルール」などは、「きまり」や「規則」といった類義語間の意味的・用法的な空白を埋めるような働きを獲得しています（右の図）。

（4）外来語が増えた要因：

新聞の文体が描写的から概略的に変化

抽象的な外来語の基本語化には、20世紀後半の新聞文章の文体変化も影響しています。1950年の新聞記事（特に社会面）を読むと分かりやすいのですが、新聞の叙述は、戦後の「描写的（物語的）」な色彩の強い文体から、事実を淡々と「概略的（要約的）」に報告する文体へと大きく変化しました。事件や事故を事細かに表現するには意味範囲の狭い既存の和語や漢語が用いられましたが、概略的に報告する近年の文体では非分析的で意味範囲の広い外来語が選ばれるようになったというわけです。

現在、私は、この『毎日新聞経年コーパス』を使って、外来語だけでなく、20世紀後半に基本語化したと考えられる和語や漢語についても調査分析を進めています。これからも、直感や印象だけでは気付くことのできない、日本語の変化の新たな発見を続けていきたいと思います。

参考文献：*1 金 愛蘭（2024）『外来語の基本語化—現代新聞「叙述語彙」への進出』大阪大学出版会

*2 金 愛蘭（2011）『20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』阪大日本語研究別冊3号

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/11330/>

知的好奇心に駆られた研究をしていきたい

井戸美里 国立国語研究所 研究系 特任助教



——日本語の評価的な表現の記述的研究をされていると伺いました。評価的な表現とは、どういうものでしょうか。

例えば「砂糖入りの緑茶なんかおいしくないよね」という文で話者が言いたいのは、「砂糖入りの緑茶はおいしくない」ということです。この文で「なんか」は、言いたい内容に直接貢献していません。では、この「なんか」がしていることは一体何でしょうか。直感的には、話者にとって価値の低いものという意味を含んでいるように感じられます。そのようなことばを評価的な表現と呼んで研究しています。

大学の卒業研究で指導教官から勧められるままに決めたテーマだったのですが、話者の価値観や前後の文脈などさまざまな問題が絡み合っていて、一筋縄ではいきません。それが面白くて、楽しくて、いつの間にか抜け出せなくなっていました。

——大学生のときから言語学者になろうと考えていたのですか。

学問の道に進みたい気持ちはあります、就職活動もしていました。でも届くのは“お祈りメール”ばかり。落ち込んでいたら、指導教官に「あなたは言語学研究に向いていると思うよ」と言われ、甘いことばに誘われるまま大学院に進み、今ここにいます。

——どういう点が言語学研究に向いているのでしょうか。

指導教官がどう思っていたのかは分からないのですが、別の人には「面白い現象を拾ってくる嗅覚がある」と言われたことがあります。確かに、どんなテーマについても、この方向から掘つていったら面白い現象が出てきそうだ、こうした方が面白い分析になる、と考えるのは楽しくて好きですし、得意です。

——言語学の魅力はどのような点だと思われますか。

研究室にいるときだけでなく、お風呂に入っているときでも、掃除をしているときでも、いつでも面白い例文を考えられるというのが、言語学の好きなところです。趣味を聞かれたら「考えること」と答えようと思っているくらい考えることが好きなのですが、言語学はそんな私にうってつけの学問だったのかもしれません。

——考えることが好きというのは、こどものころからですか。

はい。よく空想にふけっていました。小さいころは漫画家になりたくて、ストーリーを考え付いては、つたない漫画を描いていました。その夢はかならませんでしたが、大学院生のときに

研究室仲間と言語学漫画を描いてSNSに投稿して遊んだこともあります。言語学の先生からコメントを頂くこともあります。結構人気だったんですよ。今は活動休止中ですが、いつか言語学の面白さを伝える活動につなげられたらいいなと思っています。

——子育て中だと伺いました。

1歳と4歳の子どもがいます。私が大学院生のころは、ワークライフバランスの話を聞いても、昼夜の別なく研究しているのにワークとライフのバランスをどう取ればいいのか、任期付きポジションではライフィベントの計画を立てられないと、将来がとても不安でした。でも実際の私は、育児休暇を2回取り、コロナ禍をきっかけに広まった在宅勤務やオンライン研究会を活用しながら、研究を続けることができています。若い研究者の中には将来に不安を感じている人がいるかもしれません。私の経験からしか言えませんが、時代も考え方も変わっていきましたし、あまり思い詰めないで、と伝えたいですね。私はたくさんの人からさまざまな恩恵を受けてきたので、将来的には、育児や介護があっても研究を続けられる環境づくりにも携わっていきたいと思っています。

——研究が楽しいということばが何度も出てきました。

研究は本当に楽しいです。私は特任助教なので任期があります。任期付きポジションの人は、次のポジションに就くために、いつまでに論文を何本書かなければいけないと、追い立てられていることが多いです。そういう外的要因に駆り立てられてする研究も大事ですが、やっぱり私は、ああ面白いことを思い付いてしまった、これは論文にせねばならないという、自分の知的好奇心に駆られてやる研究を大切にしたいと思っています。

私は、言語学が好きで身を任せていたら、国語研に漂着しました。言語学者がこんなにたくさん集まっている場所は、日本にはほかにないと思います。しかもアプローチが多様なので、多方面から刺激があり、自分をどんどんアップデートできます。でも少し前までは、国語研の研究発表会に参加しても隅に座り、自分は若手だからと、発言するのをためらっていました。もつたいないですよね。今は、積極的に発言し、いろいろな人と関わって研究の幅を広げていこうと決めています。

ことばだけでは、ことばは理解できない

持橋大地 国立国語研究所 次世代言語科学研究センター 教授
統計数理研究所 統計基盤数理研究系 教授



——2024年8月に発足した次世代言語科学研究センターに、統計数理研究所（統数研）とのクロスマーチンピントメント制度で教授として着任されました。専門や経歴を教えてください。

統数研という理系の研究機関に所属していますが、大学受験時は文系で、東京大学文科三類に入りました。言語学を学びたかったからです。しかし、言語学の講義は「〇〇語にはどういう規則がある」といった具体的なことばかりでした。私が興味を持っていたのは言語の抽象的な問題でしたので、講義中はよくノートに数式を落書きしたりしていました。数学も好きだったからです。

文系では言語の抽象的な問題の研究は難しいと感じ、理系に進むことにしました。しかし東京大学では当時、理転と呼ばれる文系から理系への枠は1,500人中わずか2人。猛勉強を重ねて、理転を果たしました。そして、ことばをコンピュータで扱う自然言語処理という自分に合った分野を見つけたのです。

大学院に進み自然言語処理の研究をしていくと、自然言語処理は機械学習の一部だと分かりました。そこで、NTTの研究所で機械学習の研究を進みました。すると、機械学習の本質は統計学だと分かったのです。こうして統数研にたどり着き、自然言語処理の数理的な基礎研究を行っています。

——自然言語処理の数理的な基礎研究とはどのようなものですか。

私の代表的な研究の一つが、教師なし形態素解析です。形態素解析は、文を単語に区切る自然言語処理の基礎技術で、検索エンジンや文章生成にも使われています。それらの場合、教師あり機械学習といって人間が正解の区切りを教えておき、コンピュータはその通りに処理しています。私は、いかに正解に近づくかではなく、コンピュータで人間のことばを理解することに興味があります。そこで、正解を教えない、教師なし形態素解析に挑戦しました。20文字の文では区切りの組み合わせは 2^{20} 通りになります。非常に難しい問題ですが、統計的な方法を用いると人間の直感に近い解にたどり着けることを示しました。自然言語処理は工学であり、実用的なことに使われています。私はそれを、科学に使うことを意識しています。

——この研究の面白さは、どういう点ですか。

ことばは複雑ですが、数理を使うときれいに表現できて、理解の糸口が見えてきます。それが面白い点です。ことばだけでは、こ

とは理解できないと思うのです。道具を使わないといけない。その道具が数理や統計です。それを使うことで、データの欠損を埋めたり、効率的なデータ収集も可能になります。

——なぜ次世代言語科学研究センターに？

統数研と国語研は隣接していて（写真は国語研の屋上で撮影。奥が統数研）、知り合いがたくさんいますし共同研究もしてきました。その中で、国語研には長年かけて収集した膨大な言語データがあるけれども、従来の言語学の手法だけできることには限界があり、もったいないと感じていました。だから、統計的・数理的な方法を使って言語学のフロンティアを広げることを目指す研究センターの構想を聞いたときは、すごい、ぜひやるべきだと思いました。そして責任ある立場で深く関わりたいと考えたのです。

——どのような研究に取り組もうとお考えですか。

方言の研究では、どのような語形や発音がどこで使われているかを言語地図にプロットし、ことばの変化とその要因を読み取ります。私は最近、方言地図に空間統計学を拡張して適用すると、従来は読み取れなかった変化の潜在因子を推定できることを示しました。この手法を使って新しい方言研究をしたいというのが一つ。もう一つが敬語の数理です。国語研や統数研などの研究者が、敬語と敬語意識に関する調査を愛知県岡崎市で1953年、1972年、2008年に行い、数理的な研究もされています。さらに最新の統計的・数理的な手法を加えることで、55年間の変化の要因などをこれまで分からなかったことが分かると考えています。

——言語学に興味を持つようになったきっかけは？

特別なきっかけがあったわけではなく、子供のころのことばに興味がありました。例えば、小学1年生で習う数を表す漢字は「千」までですが、自分で調べて「万億兆京垓杼穰…不可思議、無量大数」までをすでに憶えていました。高校生のときは、羅和辞典を持っていました。合唱部に入っていて、ラテン語の歌詞の意味を知りたいと思ったのでした。吹奏楽部ではなく合唱部に入ったのも、合唱にはことばがあるからではないかと思います。

ずっとことばに興味があったわけですから、言語研究の本場である国語研で研究できることに大きな喜びを感じています。研究者同士の日常的な交流、議論も楽しみですし、次世代言語科学研究センターを新しい言語学研究の中心地にしたいと考えています。

特集

日本語は多様です！

日本語といつても、その使われ方は年齢、性別、地域、集団、社会などによってさまざまです。

日本語を第一言語としない人が使う日本語にもバリエーションがあります。

また、外来語の使用も増えています。

この特集では、多様な使われ方をしている日本語について、

「敬語の地域差」と「言語問題」という

二つのテーマで紹介します。

家族に対して敬語を使うか。 そこには地域差がある。

大西拓一郎 国立国語研究所 研究系 教授

自分のお父さんに 尊敬語で話しかけますか？

例えば、午後から出かけるのにお父さんに駅まで車で送ってもらいたいとします。そこで、お父さんに直接、「今日は家にいるか」と話しかけることを考えてみてください。「いるか」に当たるところを皆さんはどのように言いますか。

「いる?」「いるの?」のように言う人が多いだろうと思います。「いますか?」のように丁寧語を使って言う人は少数派ではないでしょうか。「おられる?」「いらっしゃる?」のような尊敬語を使う人は、もっと少ないとでしょう。

ここで想定するお父さんは、「自分の父親」です。そんな身近な人に尊敬語を使うことは考えにくいですね。そんな言い方をしたら、急にどうした? 他人行儀な! とお父さんも戸惑うかも。でも、地域によっては、自分の父親に話しかける

場合に尊敬語を使うのです。

図をご覧ください。細かい説明は省略しますが、赤や青などのカラフルな記号で示した地域では、それぞれの地域における方言の尊敬語でお父さんに話しかけています。例えば、山陰では「オリナナル」、山陽では「オッテヤ」、四国では「オイデル」、南九州では「オリヤル」のような尊敬語が用いられています。

地域社会におけるグループと 尊敬語

人間はグループをつくりながら社会を支えます。伝統的な地域社会におけるグループ構成のあり方は、「同族集団」と「年齢階梯制」の二つに大きく分けられます。同族集団は、その名の通り、血縁を中心としたまとまりです。一方、年齢階梯制は、同じような年齢層でまとまりをつくります。大まかには、東日本は同族集団、西日本は年齢階

梯制が多いと考えられています。

年齢階梯制の社会では、成人と見なされる年齢に達すると家族から独立して年齢階梯制のグループに入ります。そうすると、親子であっても、地域社会の中では別のグループに所属することになります。

年齢階梯制社会では、社会の中で親子が分離していくため、家族サイズが小さくなります。反対に同族集団社会では、家族サイズが大きくなります。そのため、年齢階梯制社会は小家族制、同族集団社会は大家族制に該当します。

小家族制と大家族制は、国勢調査に基づく世帯別人数データで客観化できます。国勢調査における世帯は、生計を一にするまとまりですので、家族と同等に扱えます。

市町村ごとの世帯別人数の平均と、自分の父親に対する尊敬語の使用とを地図上に重ねると、世帯別人数が少ないところ

「(自分の父親に) いますか」と尋ねるときの言い方の分布	
○は、その語形が地図に現れていることを意味する。	
(国立国語研究所編『方言文法全国地図』第6集 285・286図に基づく)	
敬語動詞	
○イラシシャル類	○(わ) レル・ラレル類
○イラシシャル類+丁寧	○(わ) レル・ラレル類+丁寧
○コニ類	○(わ) ナナル類
○コニ類+丁寧	○(わ) ナナル類+丁寧
○イデナナル類	○(わ) サル・ハル・シャル類
○イデナナル類+丁寧	○(わ) サル・ハル・シャル類+丁寧
○イデナナル類	○(わ) オーニナル類
○イデナナル類+丁寧	○(わ) オーニナル類+丁寧
○ナナル類	○(わ) ナル類
○ナナル類+丁寧	○(わ) ナル類+丁寧
○テヤ類	○(わ) テヤ類
○テヤ類+丁寧	○(わ) テヤ類+丁寧
○ヤル・アル類	○(わ) ヤル・アル類
○ヤル・アル類+丁寧	○(わ) ヤル・アル類+丁寧
○ヤス類	○(わ) ヤンス・ヤス類
○オル類	○(わ) オル類
○オル類+丁寧	○(わ) オル類+丁寧
○ゴバナル類	○(わ) ゴバナル類
○ゴバナル類+丁寧	○(わ) ゴバナル類+丁寧
○イシヤル類	○(わ) イシヤル類
○イシヤル類+丁寧	○(わ) イシヤル類
○エーン類	○(わ) エーン類
○ミヤ・ミユ類	○(わ) マイ類
○モーレン類	○(わ) ミヤ・ミユ類
○オーレン・ワーレン類	○(わ) モーレン類
○マイル類	○(わ) オーレン・ワーレン類
○マイル類+丁寧	○(わ) 非尊敬・丁寧
○マイケ類	○(わ) マス・デス・デゴザイマス等
○マイケ類	○(わ) イタヌ類
○マイケ類	○(わ) ヤビン類
○その他	○(わ) その他
無回答	無回答



ろで自分の父親への尊敬語が使われていることが分かります。このことは、自分の父親への尊敬語は、小家族制、つまり年齢階梯制社会でよく使われることを意味します。

年齢階梯制社会での父と子

自分の父親に対して方言の尊敬語を使うのは、調査当時（1980年代初頭）、おおむね70代の主に男性です。彼らにとつての父と自分の関係は、親子といつても、保護者と小児の関係ではありません。地域社会の中での関係で把握することが必要です。年齢階梯制社会では、家族から独立した大人同士の関係になります。そうすると自分の父親であっても、社会的

には近所の知り合いと同等に位置付けられます。

近所の知り合いに対して「いますか」と尋ねるときの言い方の分布を、自分の父親に対する言い方の分布と比べてみました。年齢階梯制の西日本において、その二つの分布がとてもよく似ています。自分の父親に対する地域社会での扱いが、ことばとして表層化しているわけです。

聞き手との間に 距離を置く尊敬語

お父さんに尊敬語を使ったら、他人行儀な感じで驚かれるかも、と述べました。それは、尊敬語には、聞き手との間に距

離を置くという機能があるからです。

年齢階梯制社会における自分の父親に対する尊敬語は、まさにそれに当たります。親子であることは、いつまでも変わりありません。しかし、成人の自分にとっての父親は、社会的には異なるグループに属する人です。そうすると、このような社会では自分の父親に対して尊敬語を使うことが理解できるでしょう。

少し視点を変えて、「お父さん」といつても、配偶者の父親に話しかける場面を考えてみてください。尊敬語を使うことには違和感がないのではありませんか。年齢階梯制社会の父と子は、この関係に似ていると考えれば分かりやすいかもしれません。

多様化の進む日本社会に生じる言語問題に挑む



朝日祥之

国立国語研究所 研究系 教授



鎌水兼貴

国立国語研究所 研究系
プロジェクト非常勤研究員

言語問題とは

鎌水：朝日さんはなぜ言語問題の研究プロジェクトを始めようと考えたのですか。

朝日：街を歩いていると目に入る看板や聞こえてくることばなどから、多文化・多言語化がさらに進んでいることに気付きます。このような多文化・多言語化の進む言語生活において、言語コミュニケーション上でどのような支障、つまり言語問題が起きているかについて、しっかり調査研究したいと考えました。

鎌水：言語問題というのは、新しいようと思えて、実は昔からありましたよね。

朝日：そうですね。国語研では、生活の中でことばがどのように使われているか、言語生活の実態を把握するためのさまざまな調査研究を行ってきました。その中には、共通語と方言、敬語や外来語の使い方といった言語問題も含まれています。2000年代前半には、行政や医療という生活に欠かせない場で使われている外来語や専門用語について調査し、分かりやすい言い換えや説明を提案する「外来言語言い換え提案」と「病院の言葉を分かりやすくする提案」も行っています。

鎌水：今回のプロジェクトでも2000年代前半と同様の調査が計画されています。

朝日：その経年変化を検証したいというのも、このプロジェクトを考えたきっかけ

「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」と題する国語研の共同研究プロジェクトが、2022年度から6年計画で進行しています。なぜ今、言語問題なのか。そもそも言語問題とは？このプロジェクトの目的は？プロジェクトリーダーの朝日祥之さんとメンバーの鎌水兼貴さんがこれらの問い合わせについて語り合います。

けの一つです。しかし、それだけではありません。国語研では、この10年ほど言語生活についての大規模な調査研究を行っていません。社会は変化し続け、ジェンダー、ダイバーシティ、SDGsなどの新しい概念も広がっています。多様化が進む社会でどのような言語問題が起きているのかを把握し、その解決のあり方をみんなで考えていく必要があります。

鎌水：言語問題は、さまざまなレベル、分野で起きていて、範囲は広いですよね。

朝日：しかも複雑に入り組んでいます。

朝日：群馬県内でインタビューした人は、幅広く問題を把握できるように、行政や医療などの専門家と一般住民双方に対する社会調査を行います。同時にマイノリティに起きている問題を把握するため、日本以外の国や地域を出身とする人とその子弟、ろう者も調査対象としています。

客観的で信頼できる情報を提供する

鎌水：言語は、他者とコミュニケーションを取るためのものです。誰もが自己的人生で培ってきた言語觀を持っているので、ことばを批判されると、自分が批判されたように感じることもあります。例えば外来語の言い換えを提案するようなときには、社会調査に基づいた客観的な情報提示することが重要ですね。

朝日：自治体からは、住民、特に海外出身者とその子弟が何を問題と感じ、何を必要としているかを示す資料、しかも学術的な調査方法で作成した客観的で信頼できる資料の提供を求められています。

鎌水：朝日さんは海外出身者とその子弟を対象とする調査も担当されていますが、

そうした調査は日本語で行うのですか。

朝日：ウェブ調査では、回答者が答えやすい言語を選べるようにしています。フィールド調査では、海外出身者とその子弟を訪ね、日本語と出身国の言語でインタビューを行います。そして語りの中から問題と感じていることを拾い上げます。また、その日本語や出身国の言語に見られる特徴を把握します。

鎌水：そうした調査から見えてきた言語問題には、どのようなものがありますか。

朝日：群馬県内でインタビューした人は、幼少期から主に日本語を話していたのでポルトガル語をうまく話せなかったそうです。ブラジル人コミュニティーとつながりを持とうとポルトガル語で話しかけると「そんな言い回しはしない」と言われポルトガル語を話す自信を失った、と語っていました。ただし、ブラジルでの生活を経て帰国すると、地域で使われているポルトガル語がブラジルで使われていたポルトガル語とは異なっていたことを知ったそうです。このケースからは、継承語と呼ばれる家庭やコミュニティーで受け継ぐ言語の習得や使用をめぐる状況（図1）をうかがい知ることができます。

日本各地にある海外出身者とその子弟のコミュニティーでは、日常生活のやりとりに必要な日本語が身に付けば済むことから、日本語習得がある程度のところで止まってしまう場合があります。一方で、日本語を習得して日本人と変わらない生活をしている人もいます。何を問題と感じるかは人によって異なり一般化が難しいことも、調査から見えてきました。

鎌水：言語問題にはパーソナリティも

絡みます。どうすれば個人差と社会全体の問題を有機的に関連づけて総合的に解析できるかは、今後の課題です。こういう性格の人はこういう言語使用をするという単純なものではないので、私もさまざまな分析を試しているところです。

朝日：客観的で信頼性の高い情報を蓄積して提供するために、たくさん集めた個々の事象を一般化するための方法論の開発を、このプロジェクトで進める必要があると考えています。

外来語に対する意識が変わりつつある

鎌水：2023年度には自治体の職員を対象に、「行政情報を住民に分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査」を実施しました。結果はどうでしたか。

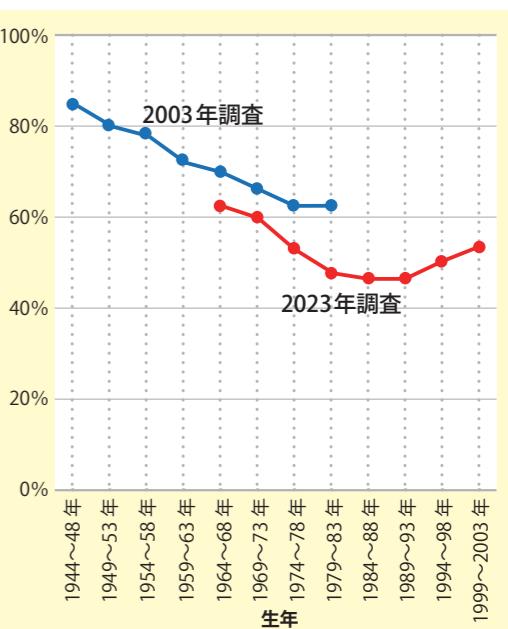
朝日：同様の調査を実施した2003年当時よりも外来語は増加傾向にあり、それを好ましいと感じる人が多いです。外来語を使うと通じやすく、便利だという理由が挙げられています。ただし、カタカナにしても難解さは変わらないという指摘や、外来語の氾濫で日本語の価値が損なわれると懸念する人もいます。

興味深いのは、外来語を言い換えたり、注釈を付けたりするべきだと考える傾向が、若い層で増えていることです（図2）。情報の提供先が、日本語を第一言語とする人か、ほかの言語を第一言語とする人か、英語をよく知っている人か、知らない人かによっても、適切な言い換えや注釈が変わってきます。住民の多様化を前提に言い換えや注釈を付けるべきだという考えが、背景にあるのかもしれません。外来語が増加し生活に溶け込んでいるように見えるけれども、外来語に対する意識や対応が変わりつつあることが、調査結果の数字に表れています。

鎌水：2000年代前半と比べて、外来語が増えただけでなく、使われる外来語も変化していると思います。英語由来の専門用語をカタカナにしたものが多くなりました。どのような言語問題があるかを把握する際には、そうした対象そのものの変化、対象に対する意識の変化にも、注意を向けなければいけませんね。

図2：「外来言語言い換え提案」は必要だと思う人の割合

図1：群馬県のNPO法人によって制作された「継承語としてのポルトガル語」Tシャツ



朝日：2024年度は一般の人を対象に、外来語に関する意識や、外来語・専門用語の使用、理解についての調査を、調査会社を通じて行う予定です。

配慮や言語転移にも注視

鎌水：今後、注視すべきだと考えている言語問題はありますか。

朝日：言語行動における「配慮」のあり方です。この配慮は例えば、お願意するときの「すいませんが」といった前置き表現などを指します。

鎌水：国語研が愛知県岡崎市で1953年、1972年、2008年に実施した敬語と敬語意識の調査では、相手への配慮は調査をするごとに増加しています。年齢差では、若いちは配慮が少なく、年を重ねると配慮が増えるという傾向があります。

朝日：コミュニケーションにおいて適切な表現を選ぶことができるかは、社会に出たときに誰もが直面する問題です。コンビニなどで働く人はマニュアル敬語を学んで使っていますが、この配慮表現を多様な言語使用場面で適切に使用できているか、またそのあり方についても関心を持っています。加えて、手話でのコミュニケーションにおける配慮のあり方は、音声言語のそれとは異なります。そのため、ろう者とのコミュニケーションで支障が生じることもあります。このような配慮

をめぐる言語コミュニケーションにおける言語問題にも調査研究を進めていきます。

もう一つが言語転移です。日本語を習得するとき、第一言語や出身国の言語による影響が出てきます。そのような現象を言語転移と呼び、日本語の場合、発音だけでなく文法や語彙にも影響が見られます。日本語以外を第一言語とする人が増えるにつれて、日本語にこれまでとは異なる変化が生じる可能性があると考えています。

鎌水：何が日本語なのか、という問題につながりますね。これは方言の例ですが、関東地方では「片づける」という意味で「かたす」ということばを使います。共通語化が進んで一時期は衰退していましたが、ほかの地域から関東に移り住んだ人が「かたす」を共通語だと誤解して使うようになり復活した、という報告があります。同じように、日本語を第一言語とする人が、日本語を第二言語または外国语として話す人から影響を受ける、ということもあるでしょうね。

朝日：絶えず変化する日本語を捉え、言語コミュニケーション上で起きている問題を把握し、その解決をみんなで考える。これは日本語のあり方や、日本語がどう変わっていくかを考えることにもつながります。それが、この言語問題プロジェクトの最終的な目標です。

アイヌ語が ゴローニン事件解決に貢献

ブガエワ・アンナ



Anna BUGAEVA。サンクト・ペテルブルグ生まれ。東京理科大学教養教育研究院神楽坂キャンパス教養部准教授。専門はアイヌ語学・北東アジアの言語・言語類型論。編著書に『アイヌ語研究の諸問題』、*Handbook of the Ainu Language. Stories in the Nivkh language by N. I. Kauna*がある。国際誌などにアイヌ語の文法に関する多数の論文を執筆。

アイヌ語は大昔から日本列島で話されていた言語ですが、日本語とはまったく違う言語で、その系統は不明です。アイヌ語は、紀元1000年ごろに本州から北海道に、1300年ごろに南樺太に、さらには1500年ごろに千島列島に伝播してきました。大きくその三つの方言に分かれています。どの方言も母語話者がすでにいませんが、最近まで残っていたのは北海道アイヌ語でした。狩猟採集民であったアイヌ人が日本とロシアの近代的な植民地主義の影響を受けた結果、千島アイヌ語は20世紀初頭に、樺太アイヌ語は1990年代に消滅してしまいました。

実は、いま使われている世界の約6,000*の言語のうち、半分が文字を持たず、また文字を持つ言語でもその多くが文字を獲得したのは19～20世紀のことです。アイヌ語の記録には17～18世紀から仮名、ローマ字、キリル文字（ロシア語など）のさまざまな表記が使われてきました。アイヌ語は固有の文字を持たないのにもかかわらず、口伝えられる伝統文学（口承文芸）の記録が盛んに行われていたので、最も豊富な文字・音声資料が残っている少数言語といってよいでしょう。ただし、資料が多いのは北海道アイヌ語だけであって、千島アイヌ語の資料はほとんど残されていません。

1604年に將軍徳川家康より北海道（蝦夷）が封土として松前藩に与えられ、アイヌ人との交易を行うために、日本人のアイヌ語通訳者（蝦夷通詞）が使われていました。最も有名な蝦夷通詞は上原熊次郎であり、彼は世界で最初に出版されたアイヌ語辞典『もしほ草』（2,000語と口承文芸のテキスト）を編纂しました。

ゴローニンは、ロシア海軍の士官で航海者で

鎖国になった江戸時代（1603-1868）には、ほとんどの外国人が日本に入れず、外国人による北海道アイヌ語の記録がほぼありませんでした。しかし、ロシアや西洋の諸国が東方への拡張にますます関心を持つようになったため、キリル文字とローマ字で書かれた千島アイヌ語や樺太アイヌ語の記録が多少残っています。最も早いのは、ロシア皇帝が計画した第二次カムチャツカ遠征（1733-1743）に参加したロシア人の探検家Krasheninnikovによって作成された297語の千島アイヌ語リストです（1755）。フランスの海軍士官Lapérouseの航海記には160の樺太アイヌ語が含まれています（1797）。Kruzenshtern率いるロシア初の世界一周航海（1803-1806）の共同指揮官Rezanovによって編纂されたリストには218語がありました（1805）。同じKruzenshternの遠征で収集された資料に基づいて、Davydov（Rezanovと共に後述の文化露寇の当事者）によって1,987項目のロシア語・樺太アイヌ語辞典が出版されました（1812）。

また、私がロシア国立海軍公文書館で新たに発見した北・南千島アイヌ語の用語集（230語）があり、これは1811～1813年に日本で捕虜になっていたV. M. Golovnin（1776-1831、以下ゴローニン）が記録したものだったのです（図）。この新しい資料に基づき、南千島アイヌ語は、北千島アイヌ語よりもむしろ北東部の北海道アイヌ語に近い語彙的類似性を持つと証明できました。では、この用語集はどのような状況で記録されたものだったのでしょうか。

図：ゴローニンの用語集の原本と解説

原本（左）は、左列からロシア語、北千島アイヌ語、南千島アイヌ語が書かれている。解説（右）は、左列からロシア語（原文ママ）、英訳、北千島アイヌ語のキリル文字表記（原文ママ）、解釈、南千島アイヌ語のキリル文字表記（原文ママ）、解釈。（原本：ロシア国立海軍公文書館保管、解説：Bugaeva & Satō 2021: 176-177）

1. небо	sky	кайто	kaito
2. солнце	sun	чюпъ	cup
3. луна	moon	сируни	sirunni [appearance-black moon]
4. облако	cloud	ниспъ	nis
5. тронъ	thunder	камычъмъ	camuych'hum [go! sound]
6. молния	lightning	имиру	imeru
7. звезды	star	кета	ketu
8. ветеръ	wind	т'вера	teru
9. туманъ	mist	урраръ	urar
10. снегъ	snow	убасъ	upas
11. дождь	rain	в'ини	wen-i [bad thing]
		сиринъиль	si-wen-иль [appearance-bad]
12. день	day	сирипъръ	si-peker [appearance-bright]
13. ночь	night	сируни	sirunne [appearance-black]
14. утро	morning	нисабъ	nisat
15. вечеръ	evening	онипумъ	onipman
16. полдень	noon	томпуски	to-noski [day-middle]
17. весна	spring	пайгаръ	paybar
18. лето	summer	сакъ	sak
19. осень	autumn	гчионъ	cup
20. зима	winter	мата	mata
21. вода	water	ре	reka
22. земля	earth	аббе	ape
23. огонь	fire	слова ингъ	'no word'

した。1806年にダイアナ号の指揮を任せ、北太平洋を調査するための世界一周航海（1807-1809）を行いました。当時、ロシアは千島列島の北から数えて16島を支配し、そこには約150人のアイヌ人が住んでいました。また、日本支配下の南千島の4島（国後島、択捉島、色丹島、得撫島）には、よりたくさんのアイヌ人が住んでいました。

ゴローニンは1811年にダイアナ号を指揮して千島列島を航海し、まず羅処和島などロシア支配下にあった7島の調査を終えました。その後の7月11日に彼と6人の乗組員、および千島アイヌ人の若者アレクセイは薪水の補給のために立ち寄った国後島で松前藩に捕まり、函館と松前で2年間捕虜として過ごしました。

ゴローニンが捕虜にされた理由は、Rezanovがロシア外交官として1804年に長崎に来て通商を求める拒絶された後、部下のKhvostovとDavydovに日本への武力行使を命じたことがあります。彼らは南樺太や利尻島の漁業拠点を攻撃し、択捉島では南部藩や津軽藩の駐屯地を打ち破り、数名の日本人を捕虜にしました。この事件を文化露寇（1807）と言います。

さて、ゴローニンはいつ、この用語集を書き留めることができたのでしょうか。捕虜生活の中では紙がほとんどなく、自由もなかったので、それは不可能だったでしょう。

用語集を編纂する可能性があったのは、捕虜になる数週間前だったと考えられます。1811年6月19日、ダイアナ号は択捉島近くにあり、ゴローニンは島を調査させました。そこで日本人や羅処

和島出身の北千島アイヌ語を母語とするアイヌ人と出会い、その中に前述の若者アレクセイがいました。彼は、ロシア語が堪能だったことに加え、択捉島での1年間の経験から南千島アイヌ語も知っていました。そして、その後に計画されていた得撫島の調査を手伝うためにダイアナ号に招かれました。ゴローニンがアレクセイから北・南千島アイヌ語の用語集を記録できたのは、この時期だったと思われます。

重要なのは、ゴローニンたちの解放交渉はアイヌ語を媒介とした2段階通訳で行われたことです。交渉の中で、捕虜のアレクセイはロシア語からアイヌ語への通訳者として、前述の『もしほ草』の編纂者である上原熊次郎はアイヌ語から日本語への通訳者として働くことになりました。このようにして解放交渉の初期にゴローニンと日本人の間で、アイヌ語がリンガ・フランカ（共通語）として使われていました。ゴローニンが松前藩の捕虜になった後にロシアのダイアナ号に拿捕されカムチャツカに連行された日本人、高田屋嘉兵衛の働きなども別にあり、長い交渉の末、1813年にゴローニンたちは、文化露寇の際に捕虜になった数名の日本人商人との交換で解放されました。アイヌ語の知識が交渉の一助となり、紛争の平和的解決につながったのです。

ゴローニンはロシアに帰国後、捕虜生活を描いた『日本幽囚記』を1816年に出版し、日本人を「知識豊かで愛国的」と評価しました。書物はすぐに多くの外国語に翻訳されました。特にヨーロッパでは、情報の少ない鎖国下の日本についての重要な資料として、大きな影響力を持ちました。

*数え方によって異なります。



国立国語研究所オープンハウス

開催報告

特集

二ホンゴ探検2024

国語研のとびら開いてます！

2024年7月20日（土）、5年ぶりに
国語研を会場として一般公開を開催しました。
猛暑にもかかわらず、
1,000名を超える方々にご来場いただきました。
国語研のとびらを開けると、
どんな世界が広がっていたのでしょうか？
当日の様子を紹介します。

国語研のとびらを開けると……

「ずっと気になっていた建物に入ることができて、とてもうれしいです！」
来場者から寄せられたアンケートには、同様の感想がいくつも見られました。
入り口を入ると、明るく開放的なエントランスホールが目の前に広がります。
受付で案内を受け取り、二ホンゴ探検の始まりです。



にほんご☆スタンプラリークイズ

6つのポスターと「れきみんワークショップ」で解説を聞いてクイズに答え、全問正解すると景品がもらえます。こどもから大人まで、多くの方にご参加いただけ

ました。各ポスターの前では研究者が解説を行い、来場者から質問も出て、活発なやりとりが見られました。ここでは、ポスターの概要とクイズの一部を紹介し

ます。ヒントがないものもありますが、ぜひ挑戦してみてください。答えは、この特集の最後のページ下部に掲載しています。

丁寧な言葉 普通の言葉

どんなときも丁寧なことばを使いますか？それはなぜ？来場者に問いかけながら解説が進みました。丁寧なことばは丁寧にしたい気持ちではないときにも使うことがある、という説明に、驚きの表情を浮かべる方もいました。



長いことばをみじかくした略語 烏日哲
リモコンや割り勘、ドタキャンなど、すでに定着している略語があります。それらの略さない言い方をご存じでしょうか。では、「キムタクごはん」を略さないで言うと？大人は考え込んでしまいますが、こどもは即答していました。人気の給食メニューだそうです。

音が消える？！

日本語では子音の後ろに母音が付いていますが、その母音の音が消えるときがあります。それはどの場合かを、のどに手を当てながら声を出して確かめもらいました。狭母音の「い」と「う」が無声子音（/p, t, k, s, h/ など）に挟まれたとき、母音の音が消え、どの振動がなくなりました。



中国チワン族の色彩表現を学び、日本語との比較をしてみよう！

恐れを感じている様子を表すとき日本語では「顔が青くなる」と言いますが、チワン語では「顔+緑」を使うことや、色は文化と切り離せないことなど、チワン族の民族衣装をまとった黄さんの解説にたくさんの人が熱心に耳を傾けていました。

クイズ1

無声化する母音があることばはどれ？

- ①ことば (kotoba)
- ②さくら (sakura)
- ③きらい (kirai)
- ④ちかい (chikai)

クイズ2

チワン語で「目+緑」というと、どういう意味になる？

- ①かわいい
- ②怒っている
- ③焼きもちを焼いている

クイズ3

漢語「番」と組み合わせているのに、現代語では和語の数え方になる数字は？

- ①1番と4番
- ②4番と7番
- ③7番と9番

クイズ4

「ビー玉」の略さない言い方はどれ？

- ①ビールの玉
- ②ビートルズが好きな玉
- ③ビードロ玉

ワークショップ

辞書引きコーナー

国語辞典を使った「しりとりワーク」は大人気で、こどもたちが真剣な表情で国語辞典をめくっていました。こどもを見

守っていた大人も、いつの間にか夢中に。国語辞典で好きなことばを探して「かるた」をつくるコーナーでは、それぞれ思いの読み札と取り札が完成しました。年代ごとの違いが見られました。

「『かっこいい』ってどう言ってる？ 投

票しよう！」には、たくさんの投票をいただきました。結果はウェブサイト「ことば研究館」の「二ホンゴ探検 2024 当日レポート」で紹介しています。年代ごとの違いが見られました。



琉球ことばの旅

沖縄や奄美で話されている琉球諸語（島ことば）を体験していただくミニシアターには、三線の音色に引かれ、たくさんの人が集まりました。石垣市新川のことばを使ったラジオ体操や、三線の演奏と沖永良部島のことばの歌詞に合わせた手遊び、クイズなどを通じて、「琉球ことばの旅」を楽しんでいただきました。



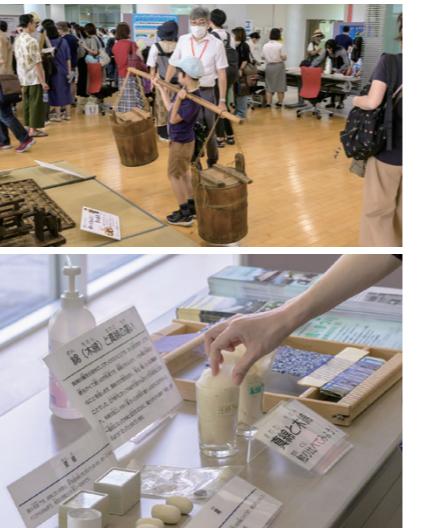
使える！「コーパス」

ことばを調べるときの強力なツールである「コーパス」を使い、研究を体験できるコーナーです。「たまご」「卵」「玉子」、最も多いのはどれかを楽しそうに調べる親子の姿も見られました。コーパスの検索ツール「少納言」は、ウェブ上で公開されており、利用条件に同意すれば、誰でも登録なしに無料で利用できます。



れきみんワークショップ

立川市歴史民俗資料館による、かつての立川の産業であり伝統文化である、桑の生産や養蚕、機織りに関する展示です。蚕が繭をつくる様子を捉えた映像や、繭の実物、昔の道具に、こどもたちは興味津々でした。繭を引き伸ばしてつくった真綿と、植物のワタの種子を覆っている織維を加工した木綿を触って比べ、違いに驚く様子も見られました。



ことばのミニ講義＆研究者トーク



ことばのミニ講義

ことばを「残す」には？

横山晶子 国立国語研究所 特任助教

世界には7,000以上*の言語がありますが、話す人が少くなり消滅の危機に瀕している言語が約2,500あり、日本の8

つのことばが含まれています。国語研ではことばを残すために、「ことばの記録」と、ことばを学ぶ絵本・教材の制作やことばを学び使える場所づくりなど「継承のサポート」を行っていることを紹介し、皆さんにもいろいろなことばを聞いて記録する「ことばの記録」を体験いただきました。

*数え方によって異なります。



研究者トーク

人の移動を表す言語表現：実験から言語を比較する

松本曜 国立国語研究所 副所長

「男の人が階段を駆け上がる」といった移動をさまざまな言語がどのように表現するかについて、実験で使ったビデオを織り交ぜながら解説しました。同じ出来

事でも言語によって、誰の視点で何をどう表現するかが大きく違います。それを通して日本語がほかの言語と比べてどのような特徴を持っているかを考える研究です。

図書室・資料室ツアー

研究資料室と研究図書室を研究者による解説付きで巡る約25分のツアーです。研究資料室には、国語研が1948年の設立以来、75年間の調査研究で収集・作成した、調査票や情報カード、収録された音源・映像、語彙調査雑誌、言語地図などの資料が保存されています。研究図書室は、日本で唯一の日本語に関する専門図書室です。貴重書である『古今文字讃』と『無垢淨光經自心印陀羅尼(百万塔陀羅尼)』もご覧いただきました。



ことばの疑問めぐり

壁の展示を見つけ、足を止めて1枚めくると、そのまま夢中になって読みふける人が、多くいました。もっと読みたい方や見逃した方は、国語研のウェブサイト「ことば研究館」の「ことばの疑問」コーナーでご覧いただけます。



多くの方にアンケートへご協力いただきありがとうございました。アンケート結果の一部を抜粋してご紹介いたします。

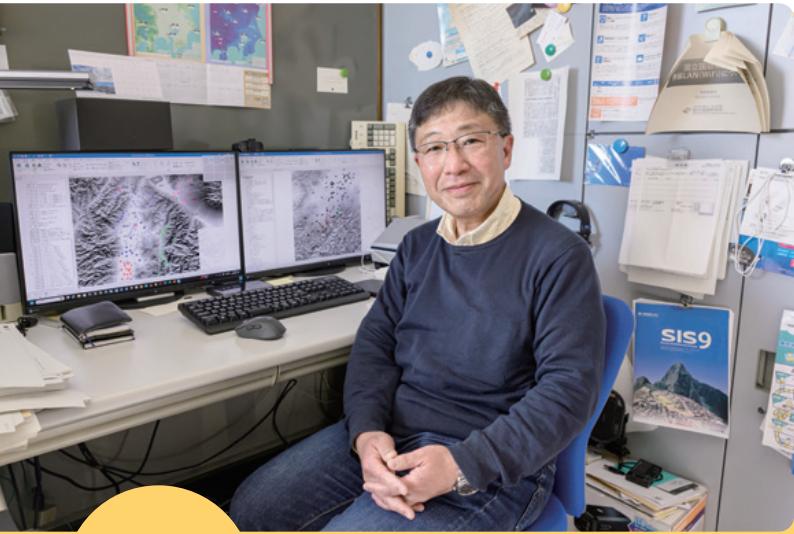
- お母さんに聞いてついてきたけれど、思っていた何倍もおもしろかったです。
- 常に使っている日本語のことを全然知らないのだと実感させられました。もつと興味を持って日本語に触れていくうと強く思いました。
- スタンプラリーの各解説が非常に面白かった。今まで考えもしなかったことがいろいろと分かって目から鱗でした。また次回があれば来たい。

来年も、国語研のとびらを開けてお待ちしています。

総合研究大学院大学 日本語言語科学コース紹介・相談コーナー

国語研は、2023年4月から総合研究大学院大学に日本語言語科学コースを開設しています。所員と在学生が、日本語言語科学コースについて紹介したり、入学を検討している方々の相談に応じたりしました。





研究室訪問

研究室を飛び出して

大西拓一郎 国立国語研究所 研究系 教授

▼『長野県伊那諷訪地方言語地図』の一部



研究室の入り口には、「秋田弁」と大きく染め抜かれたのれんが掛かっています。それをくぐって声をかけると、「どうぞ」と返事はあるものの、大西拓一郎さんの姿は見えません。デスクはパーティションの向こう側。パーティションと壁の間の細い通路を進むと、両側には講演会のちらしや新聞の切り抜き、地方のお祭りのポスターなどがびっしり張られ、方言に関する数種類の会報が束になってつり下げられています。その密度に圧倒されます。

「信州茅野の方言カルタ」を紹介する新聞の切り抜きが目に留まりました。「10年ほど前から妻の出身地である長野県茅野市に住んでいます。市民の有志とつくったもので、言語地図も付いているんですよ」。そう語る大西さんの専門は方言地理学です。「同じ日本語でも場所によって違うことばが使われています。方言地理学では、ことばの場所ごとの違いを調べ、なぜそのような違いが生じるのか、どのように変化してきたのかを明らかにします」

この記事は「研究室訪問」ですが、「ずっと研究室に座っ

*人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」国立国語研究所ユニット「地域における市民科学文化の再発見と現在」

編集後記

「ことばって不思議だな」と思った瞬間が誰にでもあると思います。言語の研究の専門家となった人たちは、皆、この素朴な疑問（センス・オブ・ワンダー）に駆り立てられて研究者となり、日々の仕事をしているようです。本号は、分野を横断するクロストーク、社会や文化と言語の関わりについての特集とエッセイ、そして文系・理系の研究者へのインタビューと、盛りだくさんの内容となりました。読者の皆さんのが、それぞれ自分自身の「ことばって不思議だな」を振り返るきっかけになれば幸いです。

（窪田悠介）

ていたのでは方言地理学の研究はできません」と笑います。調査地域に行き、人々に聞き取りを行う必要があるのです。2010年ごろから行った富山県庄川流域の調査と、長野県伊那諷訪地方の調査は、それぞれ約200地点で話を聞き、大学の研究者や学生と共同で4～5年かかりました。

研究室に戻ると、調査結果を集計して整理し、使われていることばの形を記号化して地図上に配置していきます。それが言語地図です。「以前は白地図にゴム印を押していました。ものすごく大変な作業です。その後コンピュータで作成するようになりました。さらに最近は、地理情報システム（GIS）も利用しています」と大西さん。従来の言語地図では、隣接しているのになぜ違うことばが使われているのか疑問に思うこともあったそうです。「GISの地形データを重ねると、白地図では隣接している地域の間に山があることが分かったりします。GISの活用で、方言地理学が発展すると期待されます」。ただし、「その場に行くから気付くこともある」と、大西さんは強調します。

調査中に思わぬ出会いもあります。大西さんが茅野市で調査をしていたとき、訪問予定の家の場所が分からず、道を聞こうとある家を訪ねると、「おじいちゃんも方言の調査をしていましたよ」とのこと。「方言学で有名な牛山初男さんのお宅だったのです。それが縁で、蔵に残っていた資料を調査させていただくことができました。牛山さんは大学や研究機関に属さずに研究を行っていました。方言研究では、そうした市民科学者が活躍しています」と大西さん。国語研では2022年度から「市民科学」プロジェクト*を実施しており、大西さんが代表を務めています。

「このものころは天文学者になりたかった」と言います。「高校生のとき地元の天文同好会に入っていました。その活動の中で星の名前が地域によって違うことを知って興味を持ち、天文から方言へ方向転換したのです。でも実は、星の方言の研究は難しく、断念しました」

今も天体観測を続けています。「長野は天体観測に適していて、変光星や太陽を長期間観測している同好会もあります。それも茅野に来てよかったですと思う理由です。そして最近、星の方言を研究する方法に気が付いたのです。星の方言に再挑戦し、数十年来の願いをかなえたいと思っています」

ことばの波止場 vol.14

2025年3月31日発行

編集 国立国語研究所広報室ことばの波止場編集部会
(柏野和佳子(部会長)、朝日祥之、五十嵐陽介、
井上文子、窪田悠介、福永由佳、本多由美子、横山晶子)

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
Tel 0570-08-8595
<https://www.ninjal.ac.jp/>

編集協力 フォトクリエイト(鈴木志乃)

撮影 Studio CAC(吉田号)

デザイン デザインコンビニア(山田純一)



「ことばの波止場」はウェブサイト「ことば研究館」でもご覧になります。

©2025 National Institute for Japanese Language and Linguistics